

Title	ファシズムへの偏流 : ジャック・ドリオとフランス人民党 (4)
Author(s)	竹岡, 敬温
Citation	大阪大学経済学. 2013, 63(1), p. 294-315
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/57021
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ファシズムへの偏流

—ジャック・ドリオとフランス人民党— (4)

竹岡敬温[†]

11. サン・ドニ地区多数派

ドリオは、フランス共産党から除名されたときかれが抱いた感情をどこにも書き残してはいない。しかし、かれがどのように感じたかは、知るに値する問題である。共産党との関係断絶は、他党（社会党SFIOや急進党）の世界ではそれと同等なものをみいだせないような、深い精神的動揺を伴っただろうからである。これにかんしては、ドリオ除名の3か月後に同じように除名されたアンリ・バルベの回想録のつぎのような一節に、そのエコーを聞くことができるとおもわれる。「党と関係断絶した瞬間、わたしの心を引き裂く激しい苦しみのようなものが走った。わたしは過去のすべてを、青春を犠牲にしたわたしの努力とたたかひのすべてを、なんの気晴らしもなく非合法活動と監獄で過ごした年月を、そして、わたしを数百人の他の黨員たちと結びつけていた友情と兄弟のような同志愛を思い起こした。わたしは大きな苦痛を感じた。幻想と確信から真逆さまに落下したような感じであった。このとき、わたしか深い絶望を経験したといってもけっしていいすぎではない²³⁰⁾。」共産党の世界はドリオやバルベをその全存在において拘束してきたのであり、かれらはその世界に忠実にとどまりつづけたが、しかし、その道程の最後にいたって、これまでのかれらの青春期の理想主義と党の路線を正すための空しい努力が、なんの役にも立たなかったこ

とを知り、それにたいしては償いをさせたいという押さえがたい欲望にかれらはとらわれたことであろう。

しかし、ドリオの除名は、サン・ドニの共産黨員たちには受け入れがたいものであった。除名が発表されるや、「われわれはドリオの除名を拒否する」というポスターが共産党サン・ドニ地区支部によって貼り出された。ドリオのカリスマ性、個人的魅力、市長としての重要な活動だけが、その理由ではなかったであろう。800人から900人に及ぶ大勢の黨員たちがドリオを支持したのは、かれらが1934年2月以来のドリオの活動を知っていたからであり、共産党サン・ドニ地区機関紙『解放』を読んでいたため、党の中央機関紙、とりわけ『ユマニテ』が描いたかれの戯画的描写を修正できたからであった。しばらく経ってからであったが、1934年12月27日、パリ地域最大の共産党系の在郷軍人共和連盟サン・ドニ支部も、組織の自立性を、すなわち事実上のドリオ支持を表明した²³¹⁾。

1934年夏の初めには、なお、サン・ドニ市長ドリオの行動動機は、おそらく社会党(SFIO)と統一行動をとるというかれの主張を広めたいという意志にあったとおもわれる。しかし、共産党から除名されたドリオは、かれが党指導部に反対して使用した武器である「社会

²³¹⁾ *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 8310-1, pièce du 2 janvier 1935; *L'Emancipation*, 23 juin au 14 juillet 1934; *L'Emancipateur*, no.13, 12 janvier 1935; J.-P. Brunet, *Saint-Denis la ville rouge, 1890-1939, op. cit.*, p.382sq.

[†] 大阪大学名誉教授

²³⁰⁾ H. Barbé, *op. cit.*, p.260.

党 (SFIO) との統一行動」という方針を横領され、党指導部とたたかうための政治方針をとりあげられてしまったのであった。かれの行動を怒りと復讐の渴望が貫いた。共産党指導部は、社会党 (SFIO) にはたらきかけ、社会党 (SFIO) からドリオを排除して、かれを孤立させようとした。

自分が主張してきた統一行動路線を共産党によって横領されたドリオは、労働運動の統一をいっそうつよく勧告し、その路線をエスカレートさせることによって、これに答えようとした。「われわれは、労働者の統一を資本主義に反対してたたかうために必要不可欠とみなしている。われわれは、労働者の統一を全体的に実現するために、できるだけ遠くまで、そして、できるだけ速く進むであろう」と1934年6月30日の『解放』紙にかれは書いている²³²⁾。1934年7月5日には、かれは同年2月12日にサン・ドニ市役所のバルコニーから叫んだと同様な「ただひとつの階級、ただひとつの労働組織、ただひとつの労働者の党」とのスローガンを呼びかけ、2大労働者政党のあいだで準備されていた提携から排除されまいとする意志をあきらかにした²³³⁾。

共産党と社会党 (SFIO) とのあいだの統一行動協定が締結されるや、ドリオは、両党によって設立された共闘委員会を独立的な労働者たちにも拡大するよう要求し、一方、かれの支持組織を広げるために、かれに共感を示していた活動的な労働者たちに「労働者統一友の会」を組織し、『解放』紙防衛委員会に結集するよう促した。1934年9月29日には、ドリオは、『解放』紙に、「いまや、全体的統一のときは来た。労働組織の長期の分裂は共産党に責任があり、したがって、共産党には、国の運命と社会主義の運命がもっぱら労働者の革命的統一行動の再建にかかっているときに、労働運動を無力

化してきたことに責任があることをはっきり認めさせなければならない²³⁴⁾」と書いて、共産党の極左セクト主義が労働運動の統一を遅らせたことをあらためて批判した。

サン・ドニでは、多くの場合、1934年2月に設立された反ファシズム監視委員会の後援のもとで、社会党の演説家たちも参加して、多くの集会在組織されてきた。1934年7月5日、市立劇場で大集会が開かれ、警察報告によれば2,500人（『解放』紙によれば5,000人、『ユマニテ』紙によれば1,500人）の人びとが出席した。共産党サン・ドニ地区書記アドリアン・ファラスやアンリ・バルベらが演説したあと、共産党中央委員会の支持者ル・レイが発言の許可をえたが、かれが党中央委員会の決定に賛同する意向をあきらかにしたとき、聴衆はかれに罵声を浴びせ、半時間ほどのあいだ、会場は喧騒に包まれた。30人ばかりのル・レイの仲間たちが強制的に退去させられたあと、ル・レイも聴衆の吹く口笛の野次のなか演壇を降りなければならなかった。

ついで満場の拍手に迎えられたドリオが、共産党指導部とかれとの不和の原因をくわしく説明し、党内民主主義の欠如を非難し、つぎのような言葉で、モスクワにたいする党指導部の隷従ぶりを非難した。「フランスに党を指揮できる指導部がなく、あるのはコミンテルンの指示に唯唯諾諾と従う役人集団だけです。かれらの発議権は厳しく制限され、しばしばかれらの発意はコミンテルンによって阻止されるのです・・・フランス共産党の方針転換、戦術の変更は、コミンテルンによって完全に吟味され研究された必要事によって、つまり、わたしはそう確信していますが、もっぱらロシア革命の利益になるように決定されるのです²³⁵⁾。」

²³²⁾ Doriot, 《Exclu》, *L'Emancipation*, 30 juin 1934.

²³³⁾ Meeting du 5 juillet, *L'Emancipation*, 7 juillet 1934.

²³⁴⁾ 《Doumergue attaque》, *L'Emancipation*, 29 septembre 1934.

²³⁵⁾ *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 8310-1, pièce du 6 juillet 1934; *L'Humanité*, 7 juillet 1934; *L'Emancipation*, 7 juillet 1934.

ドリオとその仲間たちは、フランス共産党がコミンテルンの決定に実際に参加し、戦術とその実行方法にかんして、一定の自立性をコミンテルンに要求することが必要であると主張した。しかしながら、このときには、まだ、かれらはロシア革命とソ連にたいする信頼を完全に放棄してはいなかった。1934年11月には、ロシア10月革命を記念するために、サン・ドニ市立劇場に大集会が召集された。そこでドリオは、つぎのような言葉で、かれの立場を明確にしている。「われわれは、この巨大で比類のない労働者解放の努力に敬意を表します・・・ただ、われわれは、フランスにおけるわれわれの政策やプロレタリア的戦術が、ソヴィエト外交の対外政策に盲従するのを承認しないだけなのです。われわれは、ソヴィエト社会主義共和国連邦（URSS）を防衛するという口実の下に、フランス帝国主義に味方して、戦争に引きずり込まれることを望んだりはしません。」10月革命を記念するだけでなく、そのほかにも、ドリオは、レーニン追悼やパリ・コミューン記念祭——1935年3-5月にフランスではじめてのパリ・コミューン展示会が開催されたのは、サン・ドニ市立博物館においてである——など、共産党の祭礼の伝統的儀式に忠実にとどまりつづけたのである。

全体として、ドリオの態度には「背信」の非難を受けるようなものはなかった。その事実の確認にくわえて、統一戦線のためのかれのたたかいを考えれば、かれの除名が正義に反するものであったということができよう。そして、そのためにこそ、サン・ドニ地区の活動家たちのかれへの連帯が広がったのであろう。事実、この時期、サン・ドニ地区の共産党では新しい入党者が続出し、1934年1月1日から同年10月半ばまでに、同地区の共産党支部では371人（そのうち冶金工101人、不熟練工124人、建築労働者45人、事務労働者34人）の新規入党

者を数え²³⁶⁾、共産党青年部にあたらしく所属した約60人は2つの新しい細胞をつくった。また、1934年10月6-7日のサン・ドニ地区の共産党の会議では、きわめて広範な支持がドリオに寄せられた。

この1934年10月6-7日の会議は、実際には、非合法的な、「分派的な」集会であった。それは共産党パリ北地域支部によって召集されたものではなく、サン・ドニ地区委員会だけの提唱によって開かれたものであった。会合は市立劇場での大集会とともに開会され、バルベの発言とドリオの演説のあと、音楽の集いが催され、地元の合唱団が「サン・ドニよ、前進せよ！」という歌を唱った。その歌詞は、「前進せよ、サン・ドニ、前進せよ！／革命的統一のために／風にはためく赤旗の下／われらはすべてのプロレタリアの先頭に立つ／血に染まった憎むべき体制に抗し／われらを脅かすファシズムを前にして／君たちよ、われわれの隊列に加われ／前進せよ、サン・ドニ、前進せよ！」というリフレインを繰り返し、1934年におけるドリオとかれの仲間たちの政治姿勢をあらわすものであった。

会合は10月6日と7日の2日間にわたって続けられ、少数派も意見を表明できた。たとえば、10月2日、共産党中央委員会のウージェーヌ・エナフが、党中央委員会を代表して、会議が党規約違反であり、会議がおこなう決定はすべて無効であるとしみすが、しかし、多数の労働者が出席しているので、かれとかれの仲間も討論に参加したいという声明文を読み上げた。事実、脅しや挑発を受けながらも、党書記マル

²³⁶⁾ *L'Emancipation*, 13 octobre 1934. この『解放』紙発表の入党者数はやや水増しされているとおもわれるが、しかし、それほど過度にはなく、1934年10月6-7日の会議のためにおそらく8月に作成された共産党サン・ドニ地区書記ファラスの報告（《Rayon de Saint-Denis, Bulletin du rayon, conférence des 6 et 7 octobre 1934》）では、新規入党者302人と数えられている。J.-P. Brunet, *Jacques Doriot, Du communisme au fascisme*, op. cit., p. 518, note (5).

セル・ジットンやパリ北地域書記ルブルーも発言することができた。しかし、『解放』紙を信じるならば、党中央委員会に忠実な少数派は、ドリオ支持の多数派の206人にたいして、わずか14人の委任状しか集めることができなかった。実際には、力関係はこれほど不均衡ではなかったが、いくつかの資料にもとづいて判断するならば、ドリオはサン・ドニ地区の共産党員のおよそ85パーセントの支持を受けていたようであった²³⁷⁾。

「サン・ドニ地区多数派」——1934年11月以来、サン・ドニのドリオ支持派の共産党員たちは自分たちを「地区多数派」と呼んだ²³⁸⁾——の勢力を増大させたひとつの要因は、社会党(SFIO)同地方支部の全面的支持であった。社会党(SFIO)の代表たちは、共産党中央委員会の支持者たちが締め出されていた反ファシズム監視委員会に積極的に参加し、サン・ドニや近隣市町村のすべての集会で、ドリオやバルベに味方して発言し、2人と同様に、「ただひとつの階級、ただひとつの労働組織、ただひとつの労働者の党」を要求した。さらに、サン・ドニ市立劇場で開催された「労働者の統一」のための集会のときには、社会党(SFIO)常任委員会のジャン・ジロンスキー、同党セヌ県連書記のファリネが、かれらの出席と演説によってドリオにたいする支持を表明した。ファリネは、「あなたは労働者の統一の先駆者です」とまでいって、ドリオを賞め上げた。これとは反対に、集会の整理員たちは、発言が予定されていたオーギュスト・ジヨーのほか、多数の

「正統派」共産党員たちの入室を妨害した²³⁹⁾。

ドリオは、サン・ドニのなかだけにとどまらず、その外に出るよう努力した。隣接市町村は深く分裂していた。ピエールフィットの市長はドリオを支持していたが、助役は共産党中央委員会に忠実にとどまっていた。エピネー、イル・サン・ドニ、ボビニー、ヴィルタヌーズ、バニヨレでは「労働者統一友の会」や『解放』紙防衛委員会が設置されていたが、その他のパリ地域の市町村や地方の諸都市——ルーアン、ル・アーヴル、トロワ、サンセール、ベルフォール、クレルモン・フェラン、ゲレ等——では、ドリオがしばしば社会党(SFIO)の演説家たちと協力して盛り上げたいくつかの集会の成功にもかかわらず、しっかりした組織を定着させるまでにはいたらなかった。ドリオが集会に姿をみせるたびに、近郊全体から多数の共産党の活動家たちが動員され、激しいトラブルを引き起こし、ドリオのスピーチは妨害された。ルーアンでは、6月1日、ドリオ支持者たちと同市のさまざまな左翼グループとによって2,000人近い人びとを集めた「統一のためのデモ」は、共産党の突撃隊によってひどく攪乱された。その後の集会のときも、同様のやり方が功を奏し、「ドリオはサン・ドニを出るな」という共産党の脅しは一定の効果あげたようであった。

全国レヴェルでも同様に、ドリオは共産党と社会党(SFIO)とのあいだに座を占めることには成功しなかった。1934年7月に共産党自身が方向転換した結果、ドリオのイニシヤティヴは、その後に押し寄せてこようとしていた大波——全左翼の反ファシズム勢力を結集した「人民連合」の誕生——に急速に飲み込まれてしまう運命にあった。ドリオにとっては、かれ自身が先覚者であった戦術を使用して、共産党がやがてきたるべき総選挙から最大の利益を

²³⁷⁾ *L'Emancipation*, 22 et 29 septembre, 6, 13 et 20 octobre 1934; *L'Humanité*, 9 et 10 octobre 1934; F. Grenier, *Ce bonheur-là*, op. cit., p.214, note (2).

²³⁸⁾ 「サン・ドニ地区多数派」とは、1934年11月3-4日、サン・ドニの隣の市エピネーにパリ郊外「赤色地帯」のモスクワに忠実な共産党員たちが党政治局および中央委員会の主要メンバーと集合し、「地区少数派」を誕生させ、以後、これだけをサン・ドニにおける党の代表と決定したことに反対して採用された呼び名である。D. Wolf, op. cit., p.135, 平瀬・吉田訳, p.142.

²³⁹⁾ *L'Humanité*, 22 novembre 1934; *L'Emancipation*, 24 novembre 1934.

えるにちがいないとおもわれたことは——いまや統一行動のチャンピオンを自任しているのがトレーズであっただけにいっそう——がまんならないことであった。「サン・ドニ地区多数派」は、1934年8月13日、プロレタリア統一党(PUP)と統一行動協定を締結し、10月21日、サン・ドニで独立労働者連合の会議を召集し、会議にはパリ郊外と地方のさまざまなグループが集まった。数か月来ドリオが繰り返し宣伝してきた基調テーマに従って、会議は「労働者階級の政治的、組合的統一の再建」を呼びかけ、連絡センターをつくり、社会党(SFIO)・共産党共闘委員会に代表を送ることを決定した。しかし、この動きを監視していた共産党は、ドリオの代表資格を承認しようとはしなかった²⁴⁰⁾。

共産党は、「サン・ドニ地区多数派」の禍根を絶つために全力を注いだ。1934年8月以後、共産党パリ北地域支部によって、党の指導方針を広く知らせるため、2つの「アジ・プロ」新聞が配布された²⁴¹⁾。かつてドリオが、「トップでの」統一行動に反対し、社会党員の労働者たちをかれらの指導者から奪い取らねばならないといたり書いたりしたことが宣伝に利用され、それが1928年以來の共産党自身の侵すべからざる戦術であり、ドリオは、党の規律を守るために、不満を抱きながらも、そうせざるをえなかったことは故意に伏せられた。反対に、1932年以來のモーリス・トレーズの演説や論説から、全体の文脈から切り離し、しばしば一部を削除して、統一戦線や統一行動に賛成した文句を引っ張り出してきて、共産党の現在の姿勢は過去の姿勢を延長したものであり、ドリオは「党から統一の理念を盗みとろう」としたのであると結論された。

共産党は、ドリオ除名の影響を最小限にとどめようとして、ドリオのほかにはバルベと、ド

リオを支持した『ユマニテ』紙の編集主幹モーリス・ルブランとの2人を除名しただけであり、そのほか数人のドリオの補佐役、とくにサン・ドニ市助役のエドゥアール・デロムとアドリアン・ファラスにたいして、規律違反の懲罰を科しただけであった²⁴²⁾。

共産党書記局は、おそらく1934年11月初めに同党中央委員会のメンバーに宛てた手紙のなかで、「ドリオに賛成する党のメンバーにたいして辛抱よく、ねばりよく、確信をもってはたらきかけるのが必要であり……これらの同志たちの反対意見に辛抱よく耳を傾け、かれらと親しく議論しなければならぬ」と主張していた²⁴³⁾。また、8月末には、党中央委員会は、「サン・ドニの革命的労働者たちへの手紙」と題したパンフレットを公表し、「かれらが望むだけ多人数の代表団を派遣し、代表団と議論する」よう提案していた。これにたいして、ドリオ支持のサン・ドニ地区委員会は、その提案を受け入れるための前提条件として、「1月以來、虚偽、中傷、過ちなど、これまで党指導部が故意に犯してきたすべての愚行にサン・ドニの共産党員が反駁できるように、『ユマニテ』に討論のための論壇を開設する」よう要求し、論壇が設けられたときには、除名され、懲罰を受けたものたちを筆頭に代表団を編成するであろうと言明した²⁴⁴⁾。

同様に、1934年11月15日、サン・ドニ地区「正統派」の書記オーギュスト・ジョーが同地区「多数派」のアドリアン・ファラスに宛てた——『ユマニテ』紙にも公表された——手紙は、「われわれは……今後、共同の日常

²⁴²⁾ 「ドリオによって結成された日和見主義的分派、バルベ＝セロール・グループの元指導者」という言葉で始まる共産党中央委員会のバルベ除名声明は、1934年9月22日の『ユマニテ』紙に発表された。*L'Humanité*, 22 septembre 1934.

²⁴³⁾ *Archives Nationales*, F⁷ 13189, 《Lettre du secrétariat du PCF aux membres du CC》.

²⁴⁴⁾ *L'Humanité*, 28 août 1934; *L'Emancipation*, 15 septembre 1934.

²⁴⁰⁾ *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 8310-1, diverses pièces; *L'Emancipation*, mai 1934 à janvier 1935.

²⁴¹⁾ *Archives communales*, carton non marqué.

活動を保証し、最善の条件で、党の会議（「サン・ドニ地区多数派」によって提案されている統一会議）を準備できるように、党の細胞と反対派グループとの同数の代表からなる委員会の設置を提案したい・・・そうすれば、われわれは、地方レベルでも、あなたの適切な提案に従って、共産党中央委員会の統一をめざす政策に賛成の3人のメンバーと反対派の3人のメンバーによって構成された、同様な委員会の設立を検討することができるでしょう」とのべて、「統一」への熱烈な意志を表明していた。ただ、ジョーは、あいかわらず、これらの委員会内で意見が一致しない場合には、「コミンテルンの調停と決定に」任せることを示唆していた²⁴⁵⁾。

共産党は、ドリオの支持勢力を切り崩したたかに全力を投入した。パンフレット、びら、折り込み広告などが大量に作成され、1934年9月末には、ドリオ派の共産党サン・ドニ地区機関紙『解放』に対抗して、『解放者』と題した新聞が発行された。

1934年11月3-4日、共産党指導部によって組織され、党書記局からはトレーズとジットンが出席した集会がエビネー（セヌ県）で開かれた。ドリオ支持の活動家たちはあらかじめ排除されていたが、出席したのは代表150人と「個人的資格で入場を許された」聴衆150人とどまった。発言の大部分、とくにトレーズの発言は、ドリオを激しく糾弾したものであったが、警察報告によれば、それらの発言では、「しばしば、政治的意見の相違よりも、個人的怨恨が大きな場所を占めているようにおもわれた。」この集会にとっておそらく唯一の「建設的」要素は、ヴィルタヌーズ（セヌ県）の労農グループの代表が出席したことであつたろう。トレーズは、かれのサン・ドニ包囲戦術を一步前進させたことに不満ではなかった²⁴⁶⁾。

このエビネーの会議では、サン・ドニ地区とパリ北地域との拠点をサン・ドニのフェリックス・フォール大通りにある協同組合事務所に置き、同市でもっと多くの集会を開くことが決定された。しかし、市役所の部屋の使用はさまざまな口実の下にいつも拒否され、カフェの所有者たちも、なにはさておき市役所と良好な関係を保たねばならないために、それにまた、店が壊されかねない乱闘が起こるのを恐れて、店を貸そうとはしなかった。党指導部は、窓も家具もない大きな倉庫や野外でいくつかの集会を開くことができたが、集会にはドリオ派が潜入し、逆に、党指導部の「指令に忠実なやつら」に分裂主義者という非難を投げ返して、最後には、集会はしばしば殴り合いに終わった。

1934年末、共産党と社会党（SFIO）が共同綱領の作成にとりかかったとき、ドリオは国有化を共同綱領に入れようと望んだ社会党（SFIO）を支持した。これにたいして、統一戦線を急進党や中産階級にまで拡大しようと腐心していた共産党は、共同綱領を当面の措置に限定するべきだと主張した。

ドリオが願っていた労働者を統一した政党は、「行動規律や社会変革の意志における自由な諸傾向に基礎を置いた労働者の大政党」であり、それは「恐慌のさなかにあつて、根本的な変革を渴望する国民のなかで」「労働者階級とその当然の同盟者、農民と中産階級²⁴⁷⁾」とを結束させることのできる政党であった。「傾向の自由」はこの党を共産党よりは社会党（SFIO）に近いものにするであろうし、また、各国支部が平等の立場で議論するインターナショナルを形成するというドリオの要求は、コミンテルンよりは社会主義労働者インターナショナルを想起させるものであった。共産党と社会党

1934-1935》, note du 6 novembre 1934; *L'Humanité*, 6 novembre 1934; *L'Emancipation*, 3 et 10 novembre 1934.

²⁴⁵⁾ J.-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme*, op. cit., p.176.

²⁴⁶⁾ *Archives Nationales*, F⁷ 13134, dossier 《Parti communiste,

²⁴⁷⁾ *L'Emancipation* (Organe central de l'Unité total des travailleurs-UT), 14 juillet 1934; *Le Populaire*, 15 juillet 1935.

(SFIO) との当時の力関係——党員数においては、ほぼ1対3——をみれば、労働運動の統一は、結局は、共産党を社会党 (SFIO) に融合させることになるだろう。そのようなことはモスクワでは論外であることをドリオは知っていたが、しかし、労働者の活動家たちにそのことを説得し、労働運動の統一を願っていたかれらから共産党の指導者たちを切り離そうと望んでいたのであろう。

しかし、ドリオの企てが共産党とコミンテルンを攻撃するための兵器であったとしても、だからといって、かれはその企てを社会党 (SFIO) のために役立てようとしていたのでもなかった。ドリオは、トレーズの党以上にブルムの党を望んでいたわけではなかった。かれは、トレーズのセクト主義とモスクワ依存を非難していたと同様、ブルムの改良主義と議会主義を批判し、「政治的統一を実現することができるのは、既成の政党のひとつにおいてはできない」と繰り返しのべた²⁴⁸⁾。既成政党の拒否と統一されたただひとつの政党の探求は、かれの労働運動再生への熱望と同時に、諸隣国でのファシズムの勝利によって引き起こされたかれの心の動揺とをあらわすものであったろう。「第2インターナショナル (社会主義労働者インターナショナル) の期待はずれの経験とヨーロッパの諸列強における第3インターナショナル (共産主義インターナショナル) の無力な革命運動の15年間ののちでは・・・価値観の全面的な見直しをおこなわなければならない。社会主義を経済的、社会的に支えた城壁のなかで、労働者階級がその歴史的役割を果たさなければならないときに、なぜ権力を獲得し、労働者階級を乱暴に押し潰したのがファシズムであったのかを問いたださなければならない」とドリオは書いている²⁴⁹⁾。

ドイツの経験が示すように、労働運動の分裂がこの不祥事の原因であった。新しい党と新しい形態の労働運動の存在だけがそれを防ぐことができるのであり、1934年10月6-7日の「サン・ドニ地区多数派」の会合での演説のなかで、ドリオは「なにか新しいものをつくりあげねばなりません」、「なにか新しいものを探求しなければなりません」と繰り返しのべ²⁵⁰⁾、その必要を示そうとした。ただひとつだけ、確かなことがあった。新しい党はドリオによって指揮され、かれの掲げる旗の下に、フランスの労働運動の統合が実現されなければならないということであった。

しかし、ドリオは、かれが夢見ていたような成果を上げることは、容易にはできなかった。「労働者統一友の会」は数百人の会員数を越えず、かれの提携していた労働者の組織は全国的規模には広がらなかった。『解放』紙の印刷部数は、公称でも、地方版は7,000部 (そのうち予約購読は2,000部)、全国版は4,000部 (予約購読は1,000部) にとどまった²⁵¹⁾。

一方、共産党は、反ファシズム監視委員会に忠実にとどまっていたサン・ドニの社会党員たちとドリオとの仲を裂こうと、社会党 (SFIO) 指導部に圧力をかけつけた。「背教者」ドリオに従っていた「サン・ドニ地区多数派」は、とりわけ共産党による説伏の対象になり、1934年11月には、新しいサン・ドニ地区共産党支部がつくられて、迷える子羊を取り戻すことに専念した²⁵²⁾。

反ファシズム監視委員会は、最初はサン・ドニ地区「正統派」共産党員の加盟を認めていたのであるが、しかし、共産党機関紙に掲載された情報から、「正統派」が、「サン・ドニ地区多

1934.

²⁵⁰⁾ *L'Emancipation (UT)*, 13 octobre 1934.

²⁵¹⁾ *L'Emancipation*, 16 mars 1935.

²⁵²⁾ Gitton, «A Saint-Denis comme partout!», *L'Humanité*, 13 novembre 1934; J.-P. Brunet, *Saint-Denis la ville rouge, 1890-1939, op. cit.*, p.384sq.

²⁴⁸⁾ Doriot, «Pour l'unité des forces autonomes», *L'Emancipation (UT)*, 27 octobre 1934.

²⁴⁹⁾ Doriot, «Pour un parti unique», *L'Emancipation*, 21 juillet

数派」を崩壊させるために、この立場を利用しようとしていることを知って、このような企てをしようという考えをはっきり放棄し、加盟諸組織にたいする批判をやめるといふ、加盟承認の前提条件を定め、共産党中央委員会の支持者たちを排除したのであった。

1935年2月12日、反ファシズム監視委員会が、1934年2月12日のデモ1周年を記念するために、サン・ドニ市立劇場で集会を開催したとき、サン・ドニ地区「正統派」の共産党員たちは、のけ者にされるのが我慢ならず、「猛攻をしかける」ことを決定し、「正統派」の書記ジョーに演説させることを要求するため、労働者たちに大勢で参加するよう促すびらをいたるところに貼り出し、近隣市町村の細胞にも呼びかけた。集会は激しい対決の場となった。ファラスに率いられたドリオ派の警備員たちは、反対派の乱入を防ぐことができず、ジョーは集会の最後に発言することができた。しかし、数百人の「正統派」党員たちの支持にもかかわらず、かれの発言はたえず中断させられ、演壇から降りるとき、かれははげしく殴打された²⁵³。

反ファシズム監視委員会に拒否されたサン・ドニ地区「正統派」共産党員たちは、同地区の社会党員からも遠ざけられた。1934年7月27日に社共両党間で全国レベルで締結された統一行動協定を実施するために、『解放者』紙と『ユマニテ』紙には共産党サン・ドニ地区の要求がたえず掲載されたが、社会党員たちはそれに耳を貸そうとはしなかった。社会党(SFIO)サン・ドニ支部は、社共共闘のための手続きを受け入れるよう、1935年3月に同地域の共闘委員会からかけられた圧力にも抵抗した。しか

し、最後には、同支部は、5月の市会議員選挙のとき、候補者リストの作成をめぐってドリオと不和になったあと、6月18日、ようやく共産党との共闘を進める決心をした。

この1935年5月のサン・ドニの市会議員選挙は、ドリオと共産党との力関係の変化を示すテストとなった。右翼候補のリストではリュドヴィック・バルテレミーの名は消え、あまり有名ではない退職した会計官ジョルジュ・ゲイが、「市防衛社会委員会」と名づけられ、『サン・ドニ新聞』の強力な支持を受けた候補者リストを率いていた。「サン・ドニ地区多数派」は、共産党、社会党(SFIO)、プロレタリア統一党(PUP)の左翼諸党にたいして、第1回投票のための共通リストの作成を提案し、任期の切れる市会議員たちのリストに加えて11の空席に候補者を立てるといふ意向をあきらかにした。共産党はもちろん、この提案を拒否したが、プロレタリア統一党(PUP)は、ドリオが率いる「労働者の統一」といふ名の候補者リストに同党の候補者4人を立てた。社会党(SFIO)には3議席が割り当てられたが、同党はこれではあまりにすくなく、お話にならないとして、同党独自のリストを提出しようとした。共産党は、ドリオが社会党(SFIO)を「軽視」していると非難した。選挙の結果は、3議席の提供が社会党(SFIO)の支持者数とほぼ正確に一致していたことが判明するのだが、しかし、候補者数決定のときに生じたこの小さな事件は、サン・ドニの社会党員たちのドリオにたいする怨恨を強めることになった。

共産党は、ドリオに立ち向かうには、同党サン・ドニ地区書記ジョーではすこし生彩に欠け若すぎると考えて、同党の候補者リストの先頭に党書記のひとりジャック・デュクロを立てた。共産党の新聞やパンフレットは、ドリオを「変節漢」、「裏切り者」、「分裂主義者」と非難しつづけた。共産党の市政プログラムは、無料診療所の設立、各地区毎の運動場の設置、非衛

²⁵³ この集会の様態を報じた共産党サン・ドニ地区「正統派」機関紙『解放者』は、ジョーが発言を始めたとき、かれは「力強い“インターナショナル”の歌声によって迎えられ、全聴衆が起立して、こぶしを振り上げ、わが党に喝采を送った」と虚偽の事実を主張している。L'Emancipateur, 16 février 1935; J.-P. Brunet, Jacques Doriot. Du communisme au fascisme, op. cit., pp. 179, 519, note (17).

生区域の一掃、不良家屋の解体とそれに代えて市立低家賃住宅の建設などなど、財政手段の裏付けのまったくない多くの約束をした、かなり大衆扇動的な内容であった²⁵⁴⁾。

共産党の目的は、ドリオが道を踏みはずさせたサン・ドニの労働者階級の最良部分をかれから取り戻すことにあった。4月17日には、デュクロは、ドリオによって計画された市立劇場での討論集会への招待に勇敢に応じて、バルベとドリオとの演説のあいだで、1時間15分ばかり演説することができた。共産党にとっては、半ば成功であった。ドリオは、サン・ドニに共産党が定着することの危険を感じ、以後、選挙戦を強化し、デュクロとジョーによって開催された集会のすべてをかれの配下たちによって妨害させた。デュクロ側の集会のときには、きまって乱闘が起こり、集会のあと、ドリオ支持の労働者のひとりが、デュクロをナイフで刺そうとして、あやまってガス工場の工具を刺して負傷させるという事件も起こった²⁵⁵⁾。

5月5日、ドリオの「労働者の統一」リストの候補者は全員当選した。棄権率がきわめて低かった(13.2パーセント)なかで、ドリオが9,790票(有効投票の56.8パーセント)を獲得したのにたいして、デュクロが獲得したのは3,943票(有効投票の22.8パーセント)にすぎなかった。有効投票の15パーセントは右翼のリストに投じられ、社会党(SFIO)の得票数は5.3パーセントでしかなかった。数週間後の県会議員選挙でも、サン・ドニ地区では「サン・ドニ地区多数派」が勝ち、ドリオの勝利を強固にした。

しかしながら、他の地域では、共産党が地歩

を回復し、ドリオをサン・ドニに孤立させることに成功した。ピエールフィットとヴィルタヌーズでだけは、ドリオの支持を受けた市(町)長が再選され、社共統一候補に勝利したが、他の地区、とりわけパリ地域以外の地方では、どこでも、『解放』紙全国版の支持を受けた「労働者統一友の会」がたたかった激しい選挙戦にもかかわらず、ドリオの仲間たちは共産党によって第2回投票の統一リストから完全に締め出され、壊滅させられた²⁵⁶⁾。

また、サン・ドニの市会議員選挙では、候補者数の決定をめぐるドリオと社会党(SFIO)サン・ドニ支部とが対立した結果、社会党(SFIO)支部は、1935年6月に、共産党の要請に応じて、共闘委員会でサン・ドニ地区の新しい共産党支部と手を結ぶにいたった²⁵⁷⁾。

12. ファシズムへ向かって

ドリオは、サン・ドニで勝利したが、以後、そこに孤立した。その後の事態の展開、人民戦線形成の気運の上昇、左翼諸政党間の関係強化、そして、共産党に妨害されてそのことになんの役割も果たせなかったドリオは、共産党の仕掛けた罠にかかったとの不愉快な気分陥った。しかし、ドリオは、ただ手をこまねいてただけではなかった。共産党の指導者たちにたいする抑えがたい憎悪は、かれに危険を承知で罠から脱出するための積極的な行動をとらせた。それは極右への方向転換である。その行動はかんたんには説明しがたい。しかし、それがいったいどのようにして始まったのかを理解しようと努めることは重要であろう。

この方向転換において、1935年のフランスの政治に影響をあたえた多くの新しい動きのなかで、とりわけ、フランスの外交政策——な

²⁵⁴⁾ 《Parti communiste (Section Française de l'Internationale Communiste), Rayon de Saint-Denis. Programme municipal pour Saint-Denis》と題したパンフレットが配布された。

²⁵⁵⁾ Jacques Duclos, *Mémoires, II 1935-1939, Aux jours ensoleillés du Front populaire*, Arthème Fayard, Paris, 1969, pp.35, 38; F. Grenier, *Ce bonheur-là, op. cit.*, p.218.

²⁵⁶⁾ J.-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme*, *op. cit.*, pp.181-182; Ph. Burrin, *op. cit.*, pp.185-186.

²⁵⁷⁾ Ph. Burrin, *ibid.*, p.185.

かでも仏ソ相互援助条約の締結——が大きな役割を演じたようにおもわれる²⁵⁸⁾。1935年5月2日にラヴァル首相とソ連大使とによってパリで調印された仏ソ相互援助条約は、1920年のトゥール大会以来「革命的敗北主義」を主張してきたフランス共産党の不意をつく事件であった。同条約が共産党の反軍国主義的宣伝活動を終わらせようとする意図をもっていただけに、そして、ラヴァル首相が、スターリンと直接接触するためにモスクワに赴き、5月16日、2人の会談のあと、「スターリン氏は、国の安全を守るのに必要な軍隊を維持するための、フランスの国防政策を完全に理解され、それに同意された」とのコミュニケを発表しただけに、いっそうフランス共産党の驚きは大きかった。

仏ソ相互援助条約とラヴァル＝スターリン共同コミュニケにたいして、ドリオはすぐさま、「これは最近15年間のもっとも重要でもっとも悲しむべき事件である。それはひとつの時代の終わり、国際的プロレタリアートの革命的組織としての第3インターナショナル（コミンテルン）の終わりを示している・・・ソヴィエト連邦は、資本主義諸国にたいしてまったく干渉せず、労働者と同盟するという条件でしか、国際的革命運動と協力して、その革命的役割を果たしつづけることはできなくなった」とのコメントを『解放』紙に寄せた。フランスでは、1914年以来、とくに社会党（SFIO）が分裂してフランス共産党が誕生した1920年のトゥール大会以来、つねに国防問題は労働運動分裂の原因の核心にあった。第3インターナショナル（コミンテルン）が組織されるや、「革命的敗北主義」と帝国主義諸国間の戦争を内戦に変化させるという、レーニンの展開した古典的テーゼが共産党の信条となってきた。「ところが、同志スターリンは、だれにも予告せずに、フランス共産党のだれとも議論せずに、コミンテルン執

行委員会ともフランス共産党中央委員会とも相談せずに、ラヴァルに、このテーゼがまったく無意味であると打ち明けたのである・・・フランス共産党の狼狽はもっともである」とドリオは続けている。それではいかにすべきかとドリオは自問し、革命運動を再構築し、その勢力を再結集し、「それらに国民的独立を保証」しなければならない、とのべている²⁵⁹⁾。このように、ドリオは、一種の「国民的共産主義」とでもいうべきものに向かうことによって、「革命的敗北主義」と、帝国主義に反対するためのたたかいという信念に、なお忠実でありつづけようとしたのである。

仏ソ相互援助条約の締結とそれ以上にラヴァル＝スターリン共同コミュニケは、大多数のフランス共産党員を混乱に陥らせた。当時コミンテルンの非合法機関の専従職員であり、のちにフランス人民党でドリオと行動をともにすることになるヴィクトル・バルテレミーは、その回想録のなかで、つぎのように述懐している。「ラヴァル＝スターリン共同声明は、まるで青天の霹靂のように、わたしをほとんど仰天させた。このたった80語のコミュニケにはすべてが、フランス共産党員とそれにまた全世界の共産主義者を鼓舞してきた革命的理想にたいするすべての否定、すべての裏切りが含まれていた。ヴェルサイユ条約に反対し、アルザス地方の自治論者をも支援するまでになっていたわれわれの長期にわたるゆるぎないたたかいかや、チェコスロヴァキアという人工国家にたいするわれわれの批判は、もはや意味をもたなくなった。党の反軍国主義的、反植民地主義的活動は、いっさい禁止された。長年にわたり、国防産業の工場や兵器工場で、多くの困難、多くの危険、われわれの存在の全面的否定を代価にして追求してきた非合法活動も断罪された²⁶⁰⁾。」

²⁵⁸⁾ J.-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme*, *op. cit.*, pp.182-188.

²⁵⁹⁾ *L'Emancipation*, 25 mai 1935, éditorial «Après le défaitisme révolutionnaire. Le néo-patriotisme».

²⁶⁰⁾ V. Barthélemy, *op. cit.*, p.73.

この結果、バルテレーミーだけでなく、すくなくならぬ数の活動家たちが党を去った。セクト主義とあいつぐ方針転換は、誠実な黨員たちを引きとめておくことができなかつたのである。

1か月後の『解放』紙に、ドリオは「仏ソ条約の苦い結果」と題する論説を発表して、かれの立場をつぎのように総括している²⁶¹⁾。1) 軍事同盟は、その応答として、他国間の敵対的同盟を招き、ひとつの国家連合を他の国家連合に対立させる。かつてわれわれを1914年の戦争に引きずり込んだのは、この政策である。2) このプロレタリア国家と資本主義国家との同盟は、自然に反し、世界の革命運動の前衛にならなければならないプロレタリア国家をその資本主義同盟国の言いなりにさせるものである。3) フランス共産党とその他の諸国の共産党のコミンテルン・ロシア支部への、奴隷化とはいわぬまでも、全面的従属状態を考えれば、帝国主義国とソヴィエト社会主義共和国連邦との同盟は、各国共産党の革命的役割を無に帰させ、それらの党を帝国主義の実質的な支持者に変えてしまう。

仏ソ相互援助条約の締結に対応しておこなわれたフランス共産党の「革命的敗北主義」から「新愛国主義」へのイデオロギー的修正と、また、ようやくあきらかになったその反ヒトラー政策への合意は、社会党(SFIO)の指導者たちにとっては、共産党との統一行動への歩みを容易にするものとおもわれた。事実、すでに社会党(SFIO)は、両党間の連合を予測して、フランス共産党と交渉を始めていた。これにたいして、ドリオは、「われわれ以上に、組織的統一を歓迎するものはないであろう。われわれはすでに1年まえにそのスローガンを掲げていたのであるから」とのべる一方で、しかし、外交政策の領域では、異なる体制間の同様な「統一」は、「われわれをまさしく1914年の状態

に戻し、同じ過ちに引きずり込む危険がある。第2インターナショナル(社会主義労働者インターナショナル)の決議は“神聖連合”の不正を明確に告発し、また、第3インターナショナル(共産主義インターナショナル、コミンテルン)のすべての存在理由は反戦の抗議と闘いにあったはずである。相互援助条約とソヴィエト社会主義共和国連邦の方針転換は、労働運動のもっとも重要な2つの政党をいちじるしく後退させることになるのではなからうか。それは、おそらく、相互援助条約のもっとも現実的でもっとも痛ましい結果である²⁶²⁾」と社共接近の動きにかこつけて仏ソ条約を批判している。

このように、ドリオは「革命的敗北主義」の信念と反戦の姿勢を守りつづけ、ファシズムに反対するたたかいは戦争に反対するたたかいと切り離すことができないとあくまでも主張しようとした。また、このように、以前からとってきた反軍国主義的態度に忠実にとどまることによって、左翼の足跡を踏襲しつづけた。そして、ドリオは、かれの態度がすこしも変わってはいず、変化したのは共産党と左翼全体であると主張しつづけ、ラヴァル＝スターリン共同コミュニケが発表されるや、「変化したのはだれか・・・変節漢はどこにいるのか」と叫んだのであった²⁶³⁾。

ドリオの政治的、イデオロギー的足取りには、「一種の絶望的ロジック」があり²⁶⁴⁾、「失われた大義の追求」があった。それらの大義それぞれの追求は、つぎつぎと欲求不満に終わり、そのために、いっそう必死になったかれをつぎの大義の追求に導いていくが、しかし、結局、それぞれの大義はそのまえの大義よりいっそう危ういものであることがあきらかになってい

²⁶²⁾ Cit. par J.-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme*, op. cit., p.185.

²⁶³⁾ *L'Emancipation*, 16 mars 1935; G. D. Allardyce, op. cit., p.68; J.-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme*, op. cit., p.185.

²⁶⁴⁾ G. D. Allardyce, *ibid.*, pp.71-72.

²⁶¹⁾ *L'Emancipation*, 22 juin 1935, éditorial «Les fruits amers du pacte franco-soviétique».

く、とでも表現できるような「大義の追求」があった²⁶⁵⁾。もちろん、ドリオの政治行動の進展に矛盾がないわけではなかった。理論的レベルでは、かれは「革命的敗北主義」の信念を守り、全国民を戦争に引きずり込む「神聖連合」を告発しつつけながらも、一種の「国民的共産主義」の方向に進んだ。フランス共産党の「新愛国主義」を嘲弄したにもかかわらず、かれ自身も同じような方向に動きはじめた。ドリオが唯一変わらずもちつづけたのは、モスクワとモスクワの熱烈な信奉者、フランス共産党指導部とにたいするすさまじい敵対心であった²⁶⁶⁾。

ドリオは、その著書『フランスは奴隷国家にはならない』（1936年公刊）のなかで、「スターリンはアジアの支配者になりたいと望んでいる。それがかれの夢である。中国問題にたいするかれの情熱は、ほとんど本能的なものである・・・スターリンは、自分の歴史的重要性にふさわしいのはアジアであるとおもっている。アジアの支配者になれば、急速に世界の支配者になれるからである」、このように、東方で自由に行動できるように、クレムリンの主人は、ドイツをソ連の国境から引き離そうと懸命になっているのであり、世界のチェス盤の上で、フランスは、同国がはっきりと反ファシズム、反ヒトラー主義である人民戦線によって支配されさえすれば、そのための最良の駒になると考えているのだ、と書いている²⁶⁷⁾。

おそらく、このような分析から、フランスで誕生しつつあった人民戦線について、ドリオはつぎのような判断をするにいたったのであろう（1935年7月13日の『解放』紙の論説で）。「共産党にとっては、人民戦線はたんにフランスの反ファシズム連合なのではない。それは、ソ連邦の危険なほどに修正された最近の外交政策を

支持するために、大衆を引き連れていく手段でもある。それは、ドイツに反対し、ソヴィエト社会主義共和国連邦を一貫して支持し、フランスの大衆が願っているフランスとドイツとの平和的接近を妨げる手段である・・・それは、とりわけ、フランスの労働者階級と国民に将来起こりうる戦争の準備をさせる手段である。」そして、フランス共産党の態度は、以後、すべて、国内では反ファシズム、国外では反ヒトラー主義という2つの基準に基づいて決められ、いまや、平和主義は市民権をもたなくなったとドリオはいい、人民戦線は「ファシズム、恐慌、戦争に反対するたたかいにおいて多大な役割を演じることができ、社会解放の大きな運動の始まりとなりうるものである。しかし、そのためには、瞬時たりとも、それをソ連邦の私的な目的のために独占させてはならない」と締めくくっている²⁶⁸⁾。

いまなお、ドリオの全意識の奥底に残る1914-1918年の大戦中の恐ろしい試練、共産党の指導者のひとりとしてほとんど15年ものあいだ主張してきた「革命的敗北主義」の名残り、最近のフランス共産党の「新愛国主義」への方向転換など、幾層にも重なるかれの人間の、政治的経験の結果、当時のドリオは戦争にたいする本能的嫌悪にとらわれていた。戦争の強迫観念と、共産党の方向転換にあざむかれまいとする意志は、ドリオに、ヒトラーからの話し合いの提案を受け入れなければならないという思いを抱かせるまでになった。「戦争を避けるためには、だれとでも、必要とあらば悪魔とも、必要とあらばヒトラーとも、わたしは話し合うであろう・・・わたしには、みんなのいいたいことは分かっている。たしかに、ヒトラーは最大の悪党であり、ドイツと世界諸国の労働者階級のもっとも恐るべき敵である。しかし、実際には、ヒトラーは話し合いを提案して

²⁶⁵⁾ J.-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme*, op. cit., p.185.

²⁶⁶⁾ J.-P. Brunet, *ibid.*

²⁶⁷⁾ J. Doriot, *La France ne sera pas un pays d'esclaves*, op. cit., pp.9, 13, 58-59.

²⁶⁸⁾ *L'Emancipation*, 13 juillet 1935, éditorial 《Le Front populaire et les communistes》.

いるのである。そうせざるをえないから、そうしたのであろう。それなのに、なぜその機会をとらえようとはしないのか。もしかれが不誠実な人間ならば、どうしてそれを証明しようとはしないのか」とのべて、ドリオは、フランスの安全を保証するために、ドイツとだけでなく、すべての隣国との不可侵条約の締結を勧告した²⁶⁹⁾。

ドリオがヒトラーと交渉すべきだとの意志を表明した結果、共産党はすぐさまかれをファシストと決めつけて非難した。この数か月後の1936年3月7日、ドイツが、中欧の安全保証のためにドイツ国境の現状維持とラインラントの非武装化を決めたロカルノ条約（1925年12月1日）の破棄を宣言して、ラインラントに軍事進駐したとき、「サン・ドニ地区多数派」は『解放』紙上で激しい抗議の声をあげた。けれども、イギリスの優柔不断な態度がフランスを孤立させているのを知ったときには、ドリオは、ふたたび、フランスはヒトラーと直接会談を始めるべきだとの考えに立ち戻った²⁷⁰⁾。

ドリオは、共産党の新しい態度がフランスにとっては致命的な危険になるとの絶対的な確信を抱いていた。かれには、共産党の態度がどうみてもフランスを戦争に追いやるだけでなく、それがスターリンひとりの意志に従属しているのではないかとおもわれた。そのため、かれは、1935年9月半ばには、『解放』紙上で、フランス共産党のモスクワへの隷属に抗議するキャンペーンに乗り出し、フランス共産党がソ連の指導者から独立し、資金面でもモスクワ依存から脱するようつよく要求した²⁷¹⁾。

1935年7月14日は、人民連合（人民戦線の正式名称）の結成が宣言された日であった。この日には、まだ、ドリオは、「サン・ドニ地区多数派」の——その頃には、すでにくらか数の減少していた——活動家たちとともに、フランス革命記念の分列行進と反ファシズム大集会に参加することができた。しかし、同年秋には、ドリオと共産党とのあいだだけでなく、ドリオと人民戦線とのあいだでも、戦端が開かれた。そのきっかけとなったのは、1935年10月20日の上院選挙である。

サン・ドニ、ピエールフィット、ヴィルタヌーズの市（町）当局者たちが左翼の選挙準備集会に招かれず、また、『ユマニテ』紙が、当時首相であり、サン・ドニの隣の自治体オーベルヴィリエの市長でもあったピエール・ラヴァルとドリオが接触したと報道し、ドリオとラヴァルとの共謀を主張する論説やコミュニケを繰り返し掲載したことが動機となって、3つの市（町）の上院議員選挙人たちは、人民戦線の候補者リストに投票したものの、3人の共産党候補の名を線で消し、かれらの名に代えて、他の名前、とりわけラヴァルの名を書き、ラヴァルの選出と、人民戦線の候補者の選出阻止に一役買った。共産党はドリオがその仲間たちにラヴァルに投票させたことを非難したが、ドリオはきっぱりとその非難をはねつけた。『ユマニテ』紙は、投票日の翌日、ドリオとその仲間たちを「ラヴァルの勧誘員」と呼び、「ドリオ＝ラヴァル友好協定」をなじりつづけた²⁷²⁾。

L'Humanité, 28 et 29 septembre 1935; J.-P. Brunet, *ibid.*, pp.188-193.

²⁶⁹⁾ *L'Emancipation*, 17 août 1935; D. Wolf, *op. cit.*, p.147, 平瀬・吉田訳, p.154; J.-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme, op. cit.*, pp.187-188; Ph. Burrin, *op. cit.*, pp.209-210.

²⁷⁰⁾ *L'Emancipation*, 14 mars 1936; D. Wolf, *ibid.*, p.149, 平瀬・吉田訳, p.156; J.-P. Brunet, *ibid.*, p.188.

²⁷¹⁾ *L'Emancipation*, 14, 21 et 28 septembre, 5 et 12 octobre 1935, 18 janvier 1936; J. Doriot, *La France ne sera pas un pays d'esclaves, op. cit.*, pp.28, 30, 34-35, 42-45;

²⁷²⁾ *L'Emancipation*, 14 et 28 septembre, 12 octobre 1935; *L'Œuvre*, 21 octobre 1935; *L'Humanité*, 21 octobre 1935; Doriot, 《Pourquoi nous avons voté contre Cachin》, *L'Emancipation (UT)*, 26 octobre 1935; J.-P. Brunet, *ibid.*, p.193; Ph. Burrin, *op. cit.*, pp.203-204. 1940年7月、ドリオは、ヴィクトル・バルテレミーに打ち明けた内緒話のなかで「わたしはラヴァルとはあまりうまが合わなかったが、けれども、かれの政治行動にはしばしば感心し、われわれがかれを助けたこともあ

このため、人民戦線はドリオの決定的な排除にとりかかった。アムステルダム＝プレイエル運動を介してしか人民連合に加盟していなかったドリオは、いずれ自分がこの運動から追放されるであろうと考えて、辞表を提出した。しかし、アムステルダム＝プレイエル運動全国委員会は辞表の受け取りを拒否したうえ、1935年11月14日、誓約違反のかどでドリオの除名を宣言した。ドリオはそれまでかれの反ファシズムを疑わせるような行為はまったくしていず、『解放』紙も、旧社会党(SFIO)右派のマルセル・デアアアドリアン・マルケの提唱するネオ・ソシアリズムや「プラニスム²⁷³⁾」の思想を「ファシズムの下手な模造品」として拒否していた。けれども、もはや、ドリオとかれの支持者たちを左翼に引き止めるものはなにもなかった²⁷⁴⁾。このような状態でドリオが陥ったディレンマは、政治の舞台から姿を消すか、あるいは、左翼から追い立てられて、新しい政党——それは、望むと望まないと、右翼的性格をもつ党になるであろう——の結成にかれを向かわせるといふ道に進むか、という苦しい選択であったろう。

1935年11月24日に開かれた「サン・ドニ地区多数派」の会議は、ドリオに現状を総括する機会をあたえた。会議は不安と失意の雰囲気にも包まれていた。ドリオは、かれがいまも人民戦線に好意的ではあるが、しかし、それは共産

党が指導しない人民戦線にたいしてであると説明し、その演説の結びに、つぎのように語って、最近のかれの行動が予感させていた政治方針をはじめて表明した。「われわれは労働者階級のために、中産階級のために、農民のために、きわめて重要な行動計画をつくりあげなければなりません。それはわれわれがこれまでみかけたことのない勢力を集めることが可能な計画です。それは、すべてを包含しようとする勢力です。われわれは、なにかをしようとするこれらの勢力を一定方向に導くことができなければなりません。それは、いまは2つの陣営に分かれて、たがいにみつめあっているが、しかし、実際にはすべてが同じことを考えている若い勢力です。古い政党を毛嫌いし、それに背を向けた勢力です²⁷⁵⁾。」このドリオのスピーチは、すでにかれが極左の過去を捨てる決意をしたことを意味していたといえよう。

総選挙が近づいていた。ドリオがみずからを「独立共産主義者」と称していたにもかかわらず、任期満了の改選議員であるかれが選挙に再出馬し、代議士としてふたたび選出されるとすれば、それは左翼よりもむしろ右翼の支持をえることによってであったろう。

選挙にそなえて、ドリオ支持派のきわめて重要な宣伝媒介紙であった『解放』は紙面を一新し、その普及にいっそう力が入れた。その地方版は、1936年初めには、たぶん5,000ないし6,000部印刷され、『解放』紙防衛委員会が大声で叫びながらそれを売り、とくに選挙の時期には、無料で配布した。通常の資産に加えて、1936年2月以降は、経営者団体から巨額の資金が提供された。1936年1月末、ドリオは、なお、『解放』紙のパリの印刷業者に5万フランの債務を負っていた。しかし、その1か月足らずのちには、総額41万7,000フラン(そのうち現金は20万フラン)でサン・ドニに

る。最後の上院選挙のとき、かれがリュクサンブール宮(上院)に戻ることができたのは、少々は、われわれのおかげだったのだよ」と語っている。V. Barthelémy, *op. cit.*, p. 180.

²⁷³⁾ ベルギー労働党委員長でマルクス主義の修正を主張したヘンドリック・デ・マンが作成し、かれの党に採用させた「労働プラン」は、フランスでも、とくに社会党右派に大きな影響をあたえ、「プラニスム」と呼ばれた。「労働プラン」については、佐伯哲朗「ヘンドリック・デ・マンのプラニスム」『明治学院大学大学院紀要』第19集(3)(政治経済学篇), 1971年度, pp. 205-217を参照のこと。

²⁷⁴⁾ D. Wolf, *op. cit.*, p. 142, 平瀬・吉田訳, pp. 149-150; J.-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme*, *op. cit.*, p. 194.

²⁷⁵⁾ *L'Emancipation*, 14 décembre 1935.

印刷所を購入することができた。

左翼諸勢力が人民戦線を結成して臨んだ1936年4-5月の選挙戦のあいだ、ドリオはかれの議会活動のすべてを誇らしげに語って選挙をたたかった。とりわけ、かれが失業者のために倦むことなく払いつけてきた努力を強調し、労働者が多く住む都市の悲惨な状態と、5年に及ぶ不況のあとも、あいかかわらず失業基金の開設を拒んでいるいくつかの市や町の身勝手さを批判して、国家失業基金の設置を熱心に訴えた。

外交分野では、ドリオは、とくに、コミンテルンとフランス共産党にたいする批判と、それに関連し、平和主義の主張を中心にして、選挙戦を展開した。かれはコミンテルンと共産党にたいする敵意をあきらかにしただけでなく、あたらしい勢力の結集を呼びかけたが、しかしながら、それを「反共産主義」という語で表現するのはいささか不正確であったろう。ドリオがいぜんとして自分を「独立共産主義者」と称し、『解放』紙には、鎌とハンマーが描かれ、いぜんとして、「サン・ドニ地区共産党機関紙」というサブタイトルがつけられ、ドリオの支持者たちは、握りこぶしをあげて、いつも「インターナショナル」と「サン・ドニよ、前進せよ！」を唱っていたからである。

また、ドリオは、1936年2月6日の国会で仏ソ相互援助条約批准にかんする討論のさいにおこなった演説のなかでかれが展開した、つぎのような主張を繰り返した。「もしあなた方が批准に署名するならば、あなた方はたんに同盟国だけと条約を締結するのでなくて、多かれ少なかれ、国内のその同盟勢力と裏取引を始めなければならないのです・・・問題を裏返してよく考えてみましょう。この同盟がひっくり返されれば、戦術の転換がおこなわれ、国内では階級対階級戦術がふたたびとられ、国外では同盟国を失うことになるわけです。国内では革命的敗北主義が復活し、国外では同盟国はふたたび

あなた方と敵対関係に立ち戻ることになりませう。これがあなた方を脅かしている危険なのです。もし、国際的対立にあなた方が巻き込まれないまえに条約締結がおこなわれるならば、たいして重大なことにはならないでしょうが、しかし、それが国際的対立のさなかにおこなわれるならば、あなた方全員は戦争に突入することになるでしょう。そして、戦争の最中に、条約締結相手国はあなた方から去ってしまい、その一方、国内では条約相手国を支持する勢力はあなた方に敵対することになるでしょう。」このような言葉で最後を締めくくったドリオの演説は、仏ソ相互援助条約の締結がはらむ危険を強調し、その批准に反対したのであった²⁷⁶⁾。ドリオには、ソ連が自国の都合次第で他国との条約を一方的にやすやすと破棄しかねない国のようにおもえ、信義を守る国とはどうしてもおもえなかったのである。

さらに、ドリオは、『解放』紙上でスターリンを激しく攻撃し、1936年3月14日から4月18日までの各週、「ヨシフ・スターリンの悲喜劇的誤解」と題して、かれにたいする批判を展開した²⁷⁷⁾。同年3月5日、ロシア共産党機関紙『プラウダ』はアメリカのジャーナリスト、ハワードとスターリンとのインタビューを掲載したが、ソ連が世界革命を引き起こすことを目標とした計画や意図を抱いているかという質問を受けて、スターリンは「われわれは決してそのような計画や意図をもってはいない。もし世界の大部分がそれとは違った印象を感じているならば、それは誤解からくるのだ」と答えて

²⁷⁶⁾ J. Doriot, *La France ne sera pas un pays d'esclaves*, op. cit., pp.131-147. このドリオの国会演説は、右翼席と社会党(SFIO)の若干の平和主義者たちから拍手喝采を浴びたが、仏ソ条約の批准を阻止することはできず、1936年2月27日、下院は、353票(急進党を含むすべての左翼グループ)の賛成によって可決された。J.-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme*, op. cit., pp.196-197, 520-521; Ph. Burrin, op. cit., p.211.

²⁷⁷⁾ J. Doriot, *La France ne sera pas un pays d'esclaves*, op. cit., pp.55-78に再録されている。

いた。「悲劇的な誤解ですね」とハワードが指摘したのたいして、「そうではない、喜劇的な、いや、悲喜劇的な誤解だといえよう」とスターリンは応じ、「われわれマルクス主義者は、革命が他の諸国でおこなわれることを信じてはいるが、しかし、それが起こるのは、それぞれの国の革命家たちにとって、それが可能であり必要であるとおもわれたときだけである。革命を輸出しようなどと望むのは、非常識なことである。革命の欲求が国内で感じられないかぎり、革命は起こらない」と説明した。このスターリンの言明にドリオは注釈を加え、同じスターリンが以前これとは正反対のことを何度もいっていたことを引用し、第3インターナショナル（コミンテルン）が「お追従者のインターナショナル」になってしまったと非難したのであった。

このスターリンのインタビューは、若干の各国共産党の活動家たち、とくに、ヴィクトル・バルテレミーのような、フランス共産党やコミンテルンの専従職員であった職業的革命家たちを混乱に落とし入れた。バルテレミーは、前年の仏ソ相互援助条約の締結によって大きく動揺していたが、その回想録のなかで、このスターリンのインタビューについて、つぎのように語っている。「3月5日、『プラウダ』は外国のジャーナリストとスターリンとのインタビューを公表した。“世界革命は迫っているか”という相手の質問にたいして、スターリンは“われわれはそのような計画をもったことはない。それは誤解だ”と答えた。そうだとすれば、わたしの人生のすべては、この日まで、ひとつの誤解のために捧げられてきたことになる。他の多くの人びととともに、わたしは、まるで“死体同様に”、このような運命を甘受し、もっとも厳しい、ときには理解不能な指令を受け入れてきたのである。革命の利益の名において、このような自由意志の放棄、思想全体やすべての道徳の否定を受け入れてきたのである。

このような献身、熱狂、犠牲のすべては、“悲喜劇的な誤解”以外に正当な理由はなく、そう言い訳するしかなかったのである²⁷⁸⁾。」

実際には、ドリオが、この種の問題について、スターリンやコミンテルンに投げかけた辛辣な皮肉が選挙戦で一般の有権者たちの関心を引きとめると考えていたのは、まちがっていた。かれらにとっては、革命は日常的関心からは遠い、要するに、状況によってさまざまに違った顔を見せ、さまざまに異なる様相を呈する非現実的な観念でしかなかった。

ドリオの平和主義の主張も同様に、基本的に国内政治の領域のなかでたたかわれる選挙戦には適合しなかった。「サン・ドニ地区多数派」は1936年3月7日のドイツ軍によるラインラント占領——その口実に、ヒトラーは、最近のフランス国会による仏ソ相互援助条約の批准がロカルノ条約を無効にしたことをあげていた。また、そのことをフランス国民は知っていた²⁷⁹⁾——に抗議したが、ドリオは、フランス共産党やコミンテルンの目的が、ソ連にたいするドイツの潜在的危険をそらせるために、フランスをドイツに対抗させることであると明言する一方で、ヒトラーと話し合わなければならないと主張することをやめようとはしなかった。しかし、このような態度は、結局のところ、政治的レヴェルではけっして得策ではなく、このため、ドリオはフランスにおけるヒトラーの代理人だと非難されるまでになった²⁸⁰⁾。

共産党機関紙のひとつ『人民の声』は、このようなドリオの主張にたいして、かれの態度の急変を痛烈に皮肉った。共産党候補のフェルナン・グルニエが、「われわれが共産党員であったのも、ロシア革命を支持したのも、われわれが間違っていたからだ」とドリオの口振りを真

²⁷⁸⁾ V. Barthélemy, *op. cit.*, p.83.

²⁷⁹⁾ Ph. Burrin, *op. cit.*, p.212.

²⁸⁰⁾ J.-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme*, *op. cit.*, pp.197-198.

似て大笑いし、「それは、あなたが変わったこと（あなたは以前、それを認めたがらなかったが）を告白するものであるか、それとも、“自分がだまされていた”ということを見出すのに12年間も必要だったのは、あなたが“名だたる馬鹿だった”ということを告白するようなものだ。“共産党指導者がソ連政府の下僕である”ことを気づくのに12年間かかったドリオ氏は、いったい、その政治的知性と綱領の真正さについていかなる保証をあたえるのか。ヒトラーが戦争を望んでいることを気づくのに、さらに12年間必要だとすれば、ドリオ氏はたいへんな出来損いの平和の候補者である」と嘲笑した²⁸¹⁾。これらにくわえて、ドリオの経済、社会、政治綱領があいまいであったことも、対立候補に地歩奪回のための活動を許した。

選挙には、ドリオと共産党候補フェルナン・グルニエのほかに、3人の候補者——市役所職員で社会党員のバレ、1935年に社会党(SFIO)を除名されたトロツキスト派で、プロレタリア統一党(PUP)のフレッド・ゼレール、アンギャン・レ・バン(セーヌ・エ・オワーズ県)に住居を移した、極右を名乗るセールスマンのジュリアン——が立っていた。穏健右翼は、それとなくドリオを支持していたようであった。かれらは、ドリオの支持者の多くがなお労働者であったので、かれに不利にならないように、それ以上に積極的には動かなかった。

選挙戦は熱狂的な雰囲気の中かで終わり、第1回投票と第2回投票のあいだでは緊張はいっそう高まった。1936年4月26日の第1回投票では、棄権は極端にすくなく、わずか登録有権者の9.9パーセントでしかなかったなかで、ドリオはサン・ドニでは絶対多数——9,263票、有効投票数の50.7パーセント——を獲得した。しかし、ピエールフィットとヴィルタヌーズでは1位ではなく、全体としてのかれの得票率

は47.9パーセントであった。共産党のグルニエの票は7,176票(39.3パーセント)であり、ゼレールとジュリアンの得票率は、それぞれ3.1パーセントと3.9パーセントであった。サン・ドニで1935年5月におこなわれた前回の選挙後の1年間に、ドリオは6ポイント以上票を失っていた。実際には、かれに投票した右翼の票を考慮すれば、かれの失ったものはもっと大きかったであろう。

第2回投票では、社会党(SFIO)とプロレタリア統一党(PUP)の候補者は、共産党候補のために立候補を辞退した。5月3日の第2回投票の結果は僅差で、ドリオは11,587票(有効投票の51.4パーセント)を獲得して勝利した。相手候補グルニエの票は10,887票(48.43パーセント)であり、票差はわずかに700票であった。グルニエが第2回投票では社会党員とトロツキスト派の票を集めたのにたいして、第1回投票で極右候補に投じられた票の主要部分はドリオに振り向けられた。選挙戦にはいるまえ、グルニエは、ドリオの対立候補となるよう要請されたとき、勝てそうにないという気持をはっきり打ち明けたと語ってはいるが、しかし、かれを驚かせたのは、フランスで最大の労働者都市のひとつであるサン・ドニで、とりわけ当時パリ地域全体に急速に高まっていた人民戦線のうねりに逆らって、ドリオが選挙に勝利したということであった²⁸²⁾。

選挙終了後ただちに、グルニエと共産党は、下院議長に書簡を提出して、ドリオが選挙で不正をおこなったとして、その当選の無効を申し立てた。しかし、下院は選挙を有効と認め、共産党議員だけが反対票を投じた²⁸³⁾。

²⁸²⁾ J.-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme*, *op. cit.*, pp.199.

²⁸³⁾ 下院議長に差し出した書簡のなかでドリオの不正についてグルニエが申し立てた主張にたいして、下院は選挙結果とグルニエが提示した論拠を詳細に分析し、たとえ不正があったにせよ、いずれにしても、それは投票結果をくつがえすものではないと結論した。J.-P. Brunet, *ibid.*, pp.200, 521, note (49).

²⁸¹⁾ *La Voix populaire*, 11 avril 1936.

ドリオは、流れに反抗し、必死になって選挙をたたかい、人民戦線に勝利した。この結果、かれには、数か月来考えてきた新しいタイプの政治運動を組織するという道が開かれたようにおもわれた。

この総選挙の最中、ドリオは火の十字架団委員長フランソワ・ド・ラ・ロックを訪ねている。このときドリオは、すでに共産党との絆を絶っていたが、しかし、かれは元共産党の主要な指導者のひとりであった。まだ、フランス人民党は存在していなかった。元モロッコ現地人部隊の指揮官であったド・ラ・ロックは、リフ戦争のとき、国会で反フランス的宣伝演説をしたドリオにたいして、なにがしかの反感を抱いていたことであろう。そして、ラヴァル内閣下の1936年11月10日に公布された極右同盟解散法案にドリオ自身も賛成投票して、まだ、4か月にもなっていない。それにもかかわらず、ドリオは代表的な極右同盟である火の十字架団の領袖ド・ラ・ロックに援助を求めることを躊躇しなかったのである²⁸⁴⁾。すなわち、第2回投票前夜の1936年5月2日、ドリオは、かれの当選に火の十字架団の団員たちが協力してくれるよう依頼するために、ド・ラ・ロックに会見を要求したのであった。この協力のおかげで、ドリオはそのライバルの共産党候補グルニエとの票差700票を獲得できたのであり、このとき、2人の人物——ドリオとド・ラ・ロック——は、共産主義に反対する協調行動のために、たがいに一致して努力するという目標で合意したのであった²⁸⁵⁾。

フランス共産党指導部との葛藤と除名処分は、ドリオに、かれがそれまで活動家としての生活のすべてを捧げてきた共産党にたいする激

しい恨みを呼び起こしていた。それは、この時代、同党への献身が仇となって多くの犠牲者を生んだいわば古典的な現象であった。その結果、ドリオは、共産党の「新愛国主義」とソ連の力を強化するだけの外交政策にたいする反動として、革命的平和主義のスローガン——その計画の核心にあったのは「革命的敗北主義」であった——のもとで、労働運動統一の流れのなかにみずからを位置づけ、フランス共産党の支持者の一部を引き寄せることのできる新しい政治勢力をつくりあげようと考えたのである。

しかし、ドリオの支持基盤はサン・ドニを中心とするパリ北郊に限られ、かれが夢みた左翼統一の大連合の中核となるには、全国の労働者大衆にたいするかれの影響はあまりにも弱かった。社共連合のなかに席を占め、そこで重要な役割を演じることができなかったドリオは、一時的に結びついたにすぎない左翼の2大政党——社会党(SFIO)と共産党——を衝突させ、その残骸のうえに、共産党のセクト主義とモスクワ依存を退け、社会党の柔弱な議会主義をも退けた真の労働者の政党を再建することができると考えていたのであろうか。そうだとすれば、それは、政治組織のなんたるかを経験的に知っていた人物にしては、あまりにも無邪気な考えであったろう。

既述したように、1934年10月、ドリオはサン・ドニ地区の熱烈な支持者たちを前にして、「なにか新しいものをつくりあげねばなりません」とのべたが、その「新しいもの」とは「社会主義の明確な理念をもち、もっとも小さな建築現場、もっとも小さな工場、もっとも小さな村々にまで深く根を下ろした組織、権力を獲得するためのたたかいを必要とし、それに向かって進まなければならないことをはっきりと理解した組織なのです。フランスにおける社会主義の諸問題についての根本的な議論のなかから戦術を練り上げ、同時に少数派の絶対的権利を尊重する政党が必要とされているのです・・・民

²⁸⁴⁾ D. Wolf, *op. cit.*, p.152, 平瀬・吉田訳, p.159.

²⁸⁵⁾ Jacques Nobécourt, *Le colonel de la Rocque 1885-1946 ou les pièges du nationalisme chrétien*, Arthème Fayard, Paris, 1996, p.521.

衆と接触し、社会民主主義の議会主義の誤りを避け、同時に、共産主義のセクショナリズムの過ちを避けることができるのは、このような党なのです²⁸⁶⁾」とのかれの考えを表明していた。ドリオが、このような新しいタイプの政治組織を発足させるといふ、おそらくしばらくまえからあたためていた計画を練り上げていったのは、1935年後半から同年末にかけての頃であったとおもわれる。

その頃、「サン・ドニ地区多数派」の責任者たちは、ドリオの政治的な動きに関心を引かれ、議会制度の無力と腐敗を目の当たりにして、既成秩序を拒否し、老人支配体制の弊害を告発し、新しい運動を執拗に探し求めていた幾人もの若いジャーナリスト、知識人、シンクタンク代表たちの定期的な訪問を受けていた。かれらのなかで目立っていたのは、強力な国家、経済の組織化、政治制度や社会形態の刷新をよく求める人物たちの存在であった。

すなわち、そのなかには、元『ユマニテ』紙の編集者で、共産党中央委員会のメンバーにまでなり、モスクワのレーニン大学に学び、コミンテルンの宣伝部で働いたが、ソ連の現実に深く失望して、1929年帰国後、共産党を離党し、その後は社会党(SFIO)に移り、ついでネオ・ソシアリストたちと行動を共にしていた、第一級の理論家で雄弁家のポール・マリヨン、同じく共産党幹部の前歴をもち、元労農銀行の共産党責任者であり、その後、1930年に急進黨に入党したヴィクトル・アリギ、元『ユマニテ』紙の記者ポール・ギタール、香水製造業者フランソワ・コティから資金援助を受けたマルセル・ビュキヤールによって、1933年9月に結成されたフランシスムの元団員であり、1928年にコティによって創刊された極右日刊紙『民衆の友』に文章を書いていたジャン・マリー・エモー、元アクション・フランセーズ学生部の

指導者クロード・ジャンテらがいいた。

また、火の十字架団の領袖フランソワ・ド・ラ・ロックの「穏健な」行動や「合法主義」に不満を抱き、新しい火の十字架団の運動の社会的教義を明示した文書(広範な国家管理を要求し、政権奪取をめざして極右暴力主義的な行動を主張した行動計画)を作成したが、それがブルジョワジーの支持者たちを不安がらせるのを恐れたド・ラ・ロックによって容赦なく拒否されたため、1935年7月にド・ラ・ロックと袂を分かった国民義勇軍(火の十字架団の下部組織)の若い反逆者グループ——ベルトラン・ド・モーデュイ、イヴ・パラングー、ジャーナリストのクロード・ポプラン、技師のロベール・ルーストー、そして、貧しい家庭に生まれ、20歳で高等師範学校に入学し、卒業後は産業界に進むことを決意し、数年後には、フランス製鉄銀行、ついで製鉄業の経営者団体、鉄鋼委員会の幹部となったピエール・ピュシュ——も、サン・ドニを訪れ、ドリオやバルベラ、「サン・ドニ地区多数派」の責任者と接触していた。ピュシュは、人民戦線の打倒に役立つと考えられた政治運動に資金を提供しようとしていた重工業界と政治団体との仲介者として活動し、ドリオの計画に関心を引かれた財界を代表することになる人物であった。

こうして、ドリオのまわりには、旧共産党幹部、左翼諸党を遍歴してネオ・ソシアリズムに希望を託すにいたった人物、かつて極右同盟に加盟していたが、その指導者ド・ラ・ロックやビュキヤールに失望した人物たちが集まっていた。

さらに、幾人もの個性的人物が「サン・ドニ地区多数派」を足しげく訪れた。たとえば、1933年に、失業調査の実施をつうじてサン・ドニ市長ドリオと出合い、その人柄に惹きつけられた元急進黨員の若きジャーナリスト、ベルトラン・ド・ジュヴネルや、かつてはアンドレ・ブルトン、アラゴンらと行動を共にしてい

²⁸⁶⁾ *L'Emancipation (UT)*, 13 octobre 1934.

たシュール・レアリスム運動を離脱し、1934年2月6日の事件を契機に、それまでの政治的、思想的彷徨から抜け出し、この年、『ファシスト社会主義』と題する書物を公刊し、ドリオの新党結成の計画に夢中になり、そのなかにこそ『ファシスト社会主義』でかれが求めていた新しい世界の特徴をみいだすことができると信じた、著名な著作家ピエール・ドリユ・ラ・ロシエルらである。

ドリユ・ラ・ロシエルは、積み上げられて間がない資本主義の足場がさしたる苦労もなく覆されたロシア10月革命の出来事とはちがって、「ヨーロッパでは、巧みにつくられた複雑な建造物を打ち壊してしまうことが必要なのではない。建造物を建て直し、それに新しいリズムを染み込ませ、それに従って調整をおこなうことが必要なのである」と強調した。それはおそらく一種の改良主義的社会主義の考え方であったといえようが、しかし、かれによれば、それは「古い古典的政党の改良主義的社会主義よりはるかに人を勇気づける改良主義的社会主義」である「ファシズム」の思想であった。このように、ドリユ・ラ・ロシエルが、すでに1935年に、ドリオに真正のフランス・ファシズムの潜在的指導者、「集合的飛翔を指導し、それをひとつに束ねて駆り立てていく」ことのできるただひとりの究極的指導者の姿をみたのは、疑いのないことであった²⁸⁷⁾。

²⁸⁷⁾ Pierre Drieu La Rochelle, *Socialisme fasciste*, Gallimard, Paris, 1934, pp.129, 209-210; Bertrand de Jouvenel, *Un voyageur dans le siècle, 1903-1945*, Robert Laffont, Paris, 1979, p.287. ドリユ・ラ・ロシエルの政治思想を論じた邦語文献としては、福田和也『奇妙な廃墟 フランスにおける反近代主義の系譜とコラボラトゥール』国書刊行会、1998年、pp.143-190; 山口俊章前掲書、pp.32-45, 125-133; 西川長夫『「30年代精神」と文学』河野健二編『ヨーロッパ——1930年代』岩波書店、1980年、pp.24-78; 西川長夫『フランス・ファシズムの一視点——ドリユ・ラ・ロシエルの「ファシスト社会主義」について——』『思想』1979年7月、pp.78-104; 有田英也『政治的ロマン主義の運命——ドリユ・ラ・ロシエルとフランス・ファシズム——』名古屋大学出版会、2003年。

おそらく、ドリユ・ラ・ロシエルは、他の「サン・ドニ地区多数派」の訪問者たちよりも急速に、その立場を決めたのであろうが、しかし、だれもが、多かれ少なかれ、とまどいを感じながらも、ドリユ・ラ・ロシエルと同様な方向に新しい解決策を探し求めようとしていたのであろう。

ドリオのもとに集まってきたかれらは、フランソワ・ド・ラ・ロックの掲げた旗印²⁸⁸⁾の下に身を投じようとは考えていなかった。ド・ラ・ロックは「集合の号令をかけ、かれの部隊を鼓舞する²⁸⁹⁾」ことはできたけれども、しかし、その軍事的な力を生かすための政治的手段を欠いていた。このとき、ドリオにもド・ラ・ロックを支持する気がなかったのは、かれら以上であった。ドリオは、1936年10月に、ヴィクトル・バルテレミーにつきのように語っている。「わたしは、ラ・ロックと会った。サン・ドニの1工場経営者とわたしの友人になっていたジャン・メルモーズ²⁹⁰⁾によって、それに、

²⁸⁸⁾ フランソワ・ド・ラ・ロックの運動を論じた邦語文献は、木下半治『フランス・ナショナリズムの史的考察 (1)』有斐閣、1958年、pp.435-469; 木下半治『フランス・ナショナリズム史 (2)』国書刊行会、1976年、pp.16-62; 竹岡前掲書、pp.803-899; 剣持久木『記憶の中のファシズム 「火の十字架団」とフランス現代史』2008年、講談社; 竹岡敬温「フランス・ファシズムと火の十字架団 (1) (2)」、『フランス社会党 (PSF) の誕生と発展—極右同盟から議会議政党へ— (1) (2)」、『火の十字架団とフランス社会党 (PSF)・再論』、『ヴィシー体制と“フランス社会進歩 (PSF)” (1) (2)』、『大阪大学経済学』第59巻第2号、2009年9月、pp.1-24、第59巻第3号、2009年12月、pp.320-345、第60巻第2号、2010年9月、pp.22-46、第60巻第3号、2010年12月、pp.28-49、第60巻第4号、2011年3月、pp.23-51、第61巻第1号、2011年6月、pp.60-90、第61巻第2号、2011年9月、pp.16-36。

²⁸⁹⁾ Félix Ponteil, *Les bourgeois et la démocratie sociale, 1914-1968*, Albin Michel, Paris, 1971, pp.212-213のなかの表現。

²⁹⁰⁾ 1920年代に数々の飛行記録を打ち立てた航空郵便パイロットで、1934年に火の十字架団に入団し、人民戦線政府によって火の十字架団が解散させられたあとド・ラ・ロックが結成したフランス社会党 (PSF) では、副委員長として遇された。剣持前掲書、pp.130-132。

すこしはサビアーニ²⁹¹⁾の世話にもなって、ラ・ロックのもとに連れていかれた。しかし、ラ・ロックとわたしとのあいだには深い溝があった。ラ・ロックは自分がなにを望んでいるか分かっていない。自分がなんであるかさえ分かっていない。共産党は、かれをファシスト扱いしている。かれの支持者たちが集会で腕を上げて挨拶するからである。しかし、ラ・ロックはファシズムのなんたるかを知らない。同様に、共産主義のなんたるかも知らない。かれは善良なフランスの士官、愛国者、無秩序の反対者、秩序の信奉者にすぎない²⁹²⁾。」

ドリオは新しい政党結成の準備集会のために奔走し、将来の補佐役のグループを集め、必要な財政的支援もえた。人民戦線の台頭に不安を覚えていたいくつかの部門の経営者団体や銀行は、1935年末以来、反議会主義的な大衆政党をつくることによって、人民戦線の意図をくじき、反共産主義運動の先頭に立つことのできるリーダーを探し求めていた。かれらは、それをドリオのなかにみいだしたと信じたのである。1936年4-5月の総選挙のあと、両者のあいだで決定的な接触がもたれたようであり、6月初め、パリで、ドリオはヴォルムス銀行の専務取締役ガブリエル・ル・ロワ・ラデュリーと会い、支援の約束をえたようであった²⁹³⁾。

1936年4-5月の総選挙で人民戦線が勝利するや、社会党党首レオン・ブルムを首班とする人民戦線政府がまだ政権につかないまえに、5月11日、ル・アーヴルで工場占拠を伴うストライキが始まり、ストライキの波は5月14日にはパリに押し寄せ、さらに全国に波及した。このストライキの巨大な動きがル・ロワ・ラデュリーの決心を急がせたのは、まちがいない

であろう。1936年6月の人民戦線内閣の成立とすさまじいストライキの動きによって、既成体制転覆の激しい不安にとらえられた経営者団体や中産階級の大部分は、ドリオの企てが反共産主義の砦になるかもしれないと考えるようになったのである。

こうして、1936年6月27-28日にサン・ドニ市役所の宴会場で開催された「サン・ドニ地区多数派」の会議において、フランス人民党(Parti populaire français, 略称PPF)が結成された。新党結成の記念すべき日は、6月28日、日曜日であった。

その日の午後、ドリオは3時間に及ぶ演説をおこない、「サン・ドニの集い」の呼びかけに答えて集まった1,000人余りの聴衆の熱狂をかき立てた。「サン・ドニの集い」という表現は、ドリユ・ラ・ロシェルによって考案されたものであり、かれはこの言葉にフランス人民党の結成集会を喚起させる意味を込めたのであった。「この集いの約束は、まるでだれもそんなことをしなかったようであった。しかし、それにもかかわらず、だれもがそこに来ようと夢みていたのである。ドリオの演説が始まるまえに、わたしは、このように自分に言い聞かせていた。ドリオが話すあいだ、わたしは部屋の片隅に坐り、集まった人びとの顔を見つめていた。その多くをわたしは知らなかったが、それなのに、それらに見覚えがあるようにおもわれた。ドリオが演説を始めたとき、わたしは自分の最初の印象の間違いを訂正して、自分に言い聞かせた。“やはり、この集いの約束をしたのは、かれであったのだ”と」とドリユ・ラ・ロシェルは書いている²⁹⁴⁾。

聴衆のなかには、「サン・ドニ地区多数派」

²⁹¹⁾ シモン・サビアーニ。1936年6月にドリオが結成するフランス人民党に同年7月に入党。1938年に同党政治局にはいり、副党首にもなった。後出。

²⁹²⁾ V. Barthélemy, *op. cit.*, p.103.

²⁹³⁾ D. Wolf, *op. cit.*, pp.172-173, 平瀬・吉田訳, pp.177-178.

²⁹⁴⁾ Pierre Drieu La Rochelle, *Avec Doriot*, Gallimard, Paris, 1937, p.24. 1936-1937年に『国民解放』紙にドリユ・ラ・ロシェルが発表した論説を再録したもの。この文章は「フランス人民党の結成」という1936年7月4日の論説から引用。

の強固な中心グループ、パリ地域とセヌ・アンフェリウール県、アリエ県、ピュイ・ド・ドーム県などからやってきた労働者たち、多数の知識人、ドリオの計画に共鳴するか、または取材のためにやってきたジャーナリストたちがいたが、すぐに、かれらはすべてドリオの雄弁とその演説の新しい調子に魅了されていった。

1936年6月28日、こうして、フランス人民

党が創立された。その結成の起源には、革命的左翼と反議会主義ナショナリズムという、その両者の融合がしばしばファシズムの初期形態の特徴をなす、2つの思潮があった。それは、フランスで生まれた唯一の真の大衆的なファシスト政党あるいはファシズム的傾向をもった政党であったと認める点で、多くの歴史家たちの意見が一致している政治組織であった。

Dérive fasciste. Jacques Doriot et le Parti populaire français. 4

Yukiharu Takeoka

L'histoire politique de la France des années 1930 était marquée par l'opposition violente entre la gauche et la droite. Dans cette situation, il existait un certain nombre des hommes qui sont passés de la gauche à la droite et dont l'exemple le plus représentant était sans doute Jacques Doriot. Doriot, qui occupait au début des années 1930 une place importante au sein du Parti communiste, se retrouva à peine dix ans plus tard parmi les partisans les plus actifs de l'ordre nouveau hitlérien. Comment expliquer qu'il soit amené, d'une gauche extrêmement active qui était, dès 1934, un pionnier de l'antifascisme, à la collaboration avec Hitler?

Pour Zeev Sternhell, historien israélien, la révision du marxisme est l'explication clé qui pourra faire comprendre le glissement des hommes de gauche vers le fascisme. Mais cette démonstration de Sternhell ne peut s'appliquer au cas de Doriot. Dans cet article, nous nous sommes efforcés de préciser historiquement ses itinéraires du communisme au fascisme et de montrer les conditions qui susciteraient un tel passage.

Classification JEL: N44

Mots-clés: Doriot, communisme, fascisme